

II 特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第276回

2020年初旬以降、新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラム(SSP)でも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構(JST)では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、各種オンラインプログラムを実施している。今回はSSPの同窓会組織である、さくらサイエンスクラブのオンライン日本同窓会と、海外の若者に向けたオンライン大学訪問(横浜国立大学)に関するレポートを紹介する。

SSP日本同窓会が
就職ウェビナーを開催

JSTとSSP日本同窓会の共催で、海外からの留学生の就職に焦点を当てた「Excelling Job-Hunting in Japan as an International Student」ウェビナーが9月4日、オンラインで開催された。今回は、日本同窓会の主幹事であるLai Hung Wei氏が企画し、モデレーターを務めた。

また、開会冒頭、JSTの岸輝雄さくらサイエンスプログラム推進本部長から挨拶があり、「新型コロナウイルス感染症が依然として世界的に猛威を振るう中で、人と人との信頼関係を継続する交流を進めよう」とされる同窓会の皆様に敬意を表します。皆様には、ぜひ積極的に質問をして、多くのことを吸収して欲しいと思います」と話した。

第1セッション:

Huang Lei氏

(JBCC株システムエンジニア)

日本同窓会の幹事でもあるHuang Lei氏は、日本で働くことの長所(安全性、優れた医療システム、給与)と短所(仕事場における意思疎通、仕事量)、および就職活動の基本的な流れについて解説した。早めに就活の準備を行い、日本特有のビジネス慣習に意識を向け、日本語力を磨くのが良い。日本の大学に在学中にアルバイトを経験することで、日本語の力と社会的スキルの両者を鍛えることができる。とのアドバイスを伝えた。

第2セッション:

Austin Zeng氏

(文部科学省国費留学生協会会長)

Austin Zeng氏は、日本語をはじめとする語学力やいわゆるソフトスキル(チームワーク、場の空気を読む力など)が大学で学んだ技術的スキルよりも重視されることがある、というデータを披露した。

多くの日本企業が新卒者の成長を見込んだ「ポテンシャルベースの採用」を行っており、日本には何千もの企業が存在することから「森全体を意識するのではなく、そこから一本の木を探しだす」ことが大切であると指摘した。

第3セッション:

福島聡氏

(ASIA to JAPAN キャリアコンサルタント)

最後の講演者である福島氏は、日本特有の就活制度に焦点を当てた。同氏は企業が新卒社員に期待する事柄の事例を示し、どのようなことがそれぞれの新卒者に期待されているかにつき熟考するようアドバイスした。日本企業の多くは、長期的に働ける社員を求めているため、採用対象者の性格等を重視すること、優れたコミュニケーション能力、チームでうまく働く能力、ストレスの多い状況で働く能力等を求めていることを伝えた。

日本同窓会は今回、SSPに過去参加した世界の同窓生に向けて、出来るだけ多くに日本で就職してもらえよう、また、日本特有の就職制度で戸惑うことがないよう、同窓会としては初めて日本の就活に特化した内容でオンライン・イベントを開催した。多くの参加者からは積極的に質問が寄せられ、講演者やモデレーターから、端的で分かりやすい回答をもらった。日本同窓会においては、今回のイベントを契機に、会員の関心が高いテーマを取り上げ、日本同窓会が各国の同窓会の中核となる活動を進めることとしている。



オンラインで開催の就職ウェビナー

さくらサイエンス・ハイスクールプログラム

JST、オンライン大学訪問〜横浜国立大学〜

JSTは、9月22日に横浜国立大学との共催により、第7回さくらサイエンス・ハイスクールプログラム「オンライン大学訪問」が、横浜国立大学で開催された。本イベントは、JSTが海外の高校生に日本の大学にオンライン擬似訪問体験を提供し、日本への関心と留学意欲の向上を目的として昨年12月より毎回異なる大学において実施している。今回の横浜国立大学で7回目となる。

イベントは、横浜国立大学の本部棟大会議室を会場に午後3時よりZoomウェビナーでライブ配信された。海外各国の夏休みが終了した平日開催にも関わらず2600名超の参加者数となった。イベント中には約450の質問がウェビナー質問箱に投稿された。

主催者挨拶後、2名の学生ボランティアより横浜国立大学の概要について紹介がなされた。基本情報を数字で示したあと、「研究」「学部教育」について詳しく解説。同大における教育について、歴史と伝統を基盤とした実践的な教育の実施と、地域のみならず世界に通用する人材の育成をめざす指導をアピールした。続いて、横浜の魅力や学生生活、留学生の施設に有益な情報を紹介した。

メインプログラムとなる「研究室訪問」は留学生が研究室を訪ね、担当教官にインタビューをする様子を4本の動画にまとめてプレゼンテーションするという新たなスタイルの企画で実施された。すべての動画に英語と日本語の字幕が入り、専門用語も文字表現され、海外視聴者からは理解しやすいという反

響があった。

最初に、航空誘導制御をテーマに樋口丈浩准教授よりドローン開発研究についての解説があった。実際の活用例や宇宙利用などの説明とともに、研究を進めるにあたりコミュニケーション能力の重要性も力説された。

次に、長谷川誠教授による物質の強度制御に関する研究について説明された。信頼性の高い新規の構造材料創出について、研究室内の具体的な機器類を示しながら詳細にわかりやすく解説するとともに、研究室から視聴者にむけて、このキャンパスと一緒に研究をしようという強いメッセージを発信された。

3番手として、太田裕貴准教授により先進的メカトロニクス研究についての解説があった。専門の伸縮・変形可能な機器開発について特に注目している液体金属を中心に、実験室を映像で紹介しながら解説された。続いて自らの研究のきっかけとなった海外留学や、研究室の雰囲気、留学生へのアドバイスなどもコメントされた。

訪問の最後は、都市基盤学科の全容について菊本准教授が解説された。学部、大学院の講義や研究内容、所属する留学生数、入学方法から奨学金等について基本的な項目をわかりやすく説明された。さらに同学科で研究する5つの分野の中から、細田暁教授によるコンクリート工学、および鈴木崇之教授による水力工学の2分野について身近なインフラや沿岸地域の防災および環境保全に関し、実験装置を示しながら詳しい説明が実施された。

続く「Basic Information Study in Japan」のセッションでは、今回も日本学生支援機構より、日本留学に関する最新の情報について解説があった。

最後の「質疑応答」セッションでは、イベント中にウェビナー質問箱に投稿された約450の質問の中から、登壇された3名の教授・准教授が自ら質問を選定し、個別に解説しながら回答した。ライブ回答できなかった多くの質問に対して、同大のスタッフよりその場でテキスト回答がなされた。

終了に際し、梶島洋美副学長(国際担当)が大学を代表して視聴御礼の言葉述べ、各国の若者が一堂に会し、研究成果を達成してきたという多くの経験を踏まえ、日本で共に学んで欲しいとのメッセージを送り、全てのセッションが終了した。

このイベントの収録動画は、さくらサイエンスプログラムHPのオンライン大学訪問特設ページで視聴可能。



樋口准教授



梶島副学長



長谷川教授



太田准教授